

■観察する行動（定義）■

偏食改善指導のセラピーの中で、新しい食品を食べる行動

■対象児■

年長男児。セラピー歴3年。つみきプログラム上級課題及び就学準備課題に取り組む中。

介入前は嫌いな食品がお皿の上にあると痙攣を起こすこともあった。

■測定方法■

1週間（水曜から火曜）の間にセラピー（Th 2回・母5回）で新しく食べられるようになった食品の合計数をカウントする。ステップ11を2回できた食品を食べられる食品とする。

■介入方法■

系統的脱感作法を用いた。食品を食べる（噛んで飲み込む）ことを標的行動として、それまでの行動を段階的に11ステップに分け、各食品をステップ1から11まで動作模倣で取り組む。

- ① 指で触る
- ② 持って、捨てる
- ③ 鼻にタッチして、捨てる
- ④ 口にタッチ（チュット）して、捨てる
- ⑤ 1回なめて、捨てる
- ⑥ 3回なめて、捨てる
- ⑦ 少しかじって、残りを捨てる
- ⑧ 全部を口に入れて、噛まずに捨てる
- ⑨ 5口噛んで、捨てる
- ⑩ 10口噛んで、捨てる
- ⑪ 10口噛んで、飲み込む

■手続き■

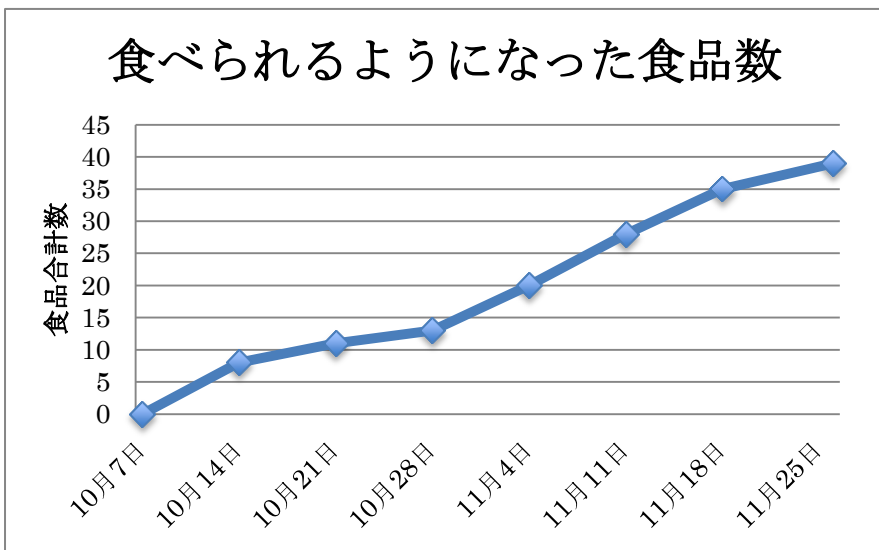
- ・ 同時に4-5品目をターゲットとして取り組む。それぞれの品目を1~1.5cm角程の大きさに切り各10個以上用意する（10口噛んだらほとんど口の中に残らないくらいの大きさにした）。ゴミ箱も用意。
- ・ <初日のみ>まずおもちゃのドーナツで①~④のステップを「こうして」と動作模倣。
初めから実際の食べ物だと何をさせられるのかわからずに抵抗が強そうだったため。
- ・ 机上のお皿1枚の上に、1試行ごとに1つの品目を2個（子どもとThそれぞれ1個）を置く。
「こうして」と言いながら指で触り（①の場合）、子どもにも同じようにさせる。
- ・ 楽しい雰囲気で行う。身体プロンプトは一切使用しない。無理やり食べさせることは決してせずに、様子を見ながら徐々にステップをあげていく。
- ・ 用意した4-5品目を同時に取り組む。何試行か連続で同じ品目に取り組むこともあれば、毎試行品目を変えることもあった。特に決まりはなく様子をみながら変えた。
- ・ 抵抗・拒否をした場合は、ステップを2段階下げて再度徐々にステップを上げていく。
- ・ 別の日に続きから取り組む際は、前回の最高ステップ（又は1つ下のステップ）から再開。
- ・ ステップ11を2回できた食品は食べられる食品として課題から外し日常での般化にまわし、代わりに新しい品目をターゲットに足す。

■ポイント・補足■

- ◇ 手で触りたくないものを口に入れるのは無理だろうということで、大人も子どもも基本的に指でつまんで食べた。ヨーグルトなどのように掴めないものはスプーンなどの道具を使った。
- ◇ 強化子は初日はシャボン玉を使ったが、その後は課題自体を楽しみ始めたので褒め言葉だけで進めた。参考文献ではお腹がいっぱいになってしまうとの理由でお菓子など食べ物は強化子に使わずトークン（→好きな活動）で取り組んでいたため、食べ物以外の強化子から始めてトークンを使うことを予定していた。
- ◇ 対象児はおしゃべりや言葉遊びが大好きなので、食品の味や匂いなどについてコメントしたり、食べ物にあだ名をつけたり（例：ひじき＝ひじきこさん）、噛むたびにその音に合わせてThが振り付けをしたり（キュウリ→シャキシヤキダンス）と、食べ物に興味を持つ様に盛り上げながら進めた。
- ◇ 参考文献の手順では、用意した全ての食品を大皿に入れてそこから食べていたのでその方法で始めたが、「こっちの方がいい」と子どもが指定し始めてコンプライアンスをとりにくかったため、その試行で食べる食品のみをお皿にのせて取り組む形に1日目に変えた。
- ◇ 初めは食べられるようになったものも3セッション程そのままターゲットに入れたことがあったが、まだ食べられないものと差が出たのか、すでに食べられるようになったものは食べるが、まだ食べられないものを見て癇癢を起こした。そのため、食べられるようになったらすぐにターゲットから外して、日常で般化にまわすようにした。

■観察期間■

2015年10月7日～2015年11月25日



* 今回は最初の品目が食べられるようになるまでの期間が7セッションだったが、参考文献では28セッションかかっていた。食べられるようになるまでに時間がかかる可能性は高い。

* 参考文献では取り組み始めてしばらくすると日常で自発的に食べられる食品が出てきた（他の食品への般化）とのこと。今回も日常で新しい食べ物に自分から試してみようとするが出てきて、課題で取り組まないでも食べられるようになった食品が増えた。

■参考■ 2015年ABAI国際学会でのPaper sessionより

Food selectivity in children with Autism: Using systematic desensitization to increase food repertoire

Amy E. Tanner and Bianca E. Andreone (Monarch House Autism Centre)